

研 究 報 告

第 21 号

- 芸術と芸術家…………… 寺 井 絃 子 (1)
—ホーフマンスタールとリルケの場合—
- 叶えられた理想と失われた身体…………… 廣 川 香 織 (23)
—ヘッセ文学の転換期における「顔」のモチーフについて—
- ヨハネス・ボブロフスキーにおける闇と光…………… 永 畑 紗 織 (45)
—『ねずみのおまつり』を中心に—
- [翻訳]
- たくましい少女たち、繊細な少年たち…………… V・ルツチュマン (65)
—ヨハンナ・シュペーリの児童文学作品について— 川 島 隆 訳
- [書評・文献紹介]
- Moritz Baßler, Bettina Gruber, Martina Wagner-Engelhaaf
(Hg.): Gespenster. Erscheinungen·Medien·Theorien. …… 熊 谷 哲 哉 (81)
- Matthias Bauer (Hg.): Berlin. Medien· und Kulturgeschichte
einer Hauptstadt im 20. Jahrhundert. …… 池 田 晋 也 (83)

2007

京都大学大学院独文研究室

『研究報告』バックナンバー

第1号(1985)

- 大川 勇: ある深層の物語の読解 — ムー
ジルの『特性のない男』研究のための序説
金子 孝吉: リルケの詩『偶像』について
田辺 玲子: 関係世界の創出 — アネッテ・
フォン・ドロスステ=ヒュルスホフの詩人像とそ
の世界
奥田 敏広: トーマス・マンの「モンタージュ技
法」について — 小説形式のパロディー

第2号(1986)

- 松村 朋彦: 心理学と小説のあいだ — カー
ル・フィリップ・モーリッツ『アントン・ライ
ザー』とその周辺
大川 勇: 千年王国を越えて — ムージルの
『特性のない男』における〈別の状態〉の行
方
加藤 丈雄: 『公子ホムブルク』について — 死
の恐怖とその超越を中心に
奥田 敏広: リオン・フォイヒトヴァンガーの小説
『成功』におけるヒラー像について — 20
年代の証言の一つとして

第3号(1988)

- 加藤 丈雄: ハッピーエンドと悲劇 — 『公子ホ
ムブルク』の多義性について
兵頭 俊樹: ヘルダーリンの‘Wie wenn am
Feiertage...’に現れるディオニュソスの形
象をめぐって
竹本 まや: トーマス・マンの『すげかえられた
首』試論
友田 和秀: 『魔の山』試論 — 主人公ハンス・
カストルプの形姿をめぐって

第4号(1990)

- 津田 保夫: 『ヴァレンシュタイン』試論 — ネメ
シスの悲劇の観点から

- 千田 春彦: フライダングの『ベシヤイデンハイ
ト』研究のために — 三つの《はざま》をて
がかりとして
宮田 眞治: 覚醒へ向けての夢想 — 『ハイン
リッヒ・フォン・オフターディンゲン』試論(1)
千田 まや: トーマス・マンの『ファウストゥス博
士』 — デューラーの機能についての一考
案
斎藤 昌人: 一カフカ像 — 『流刑地にて』をめ
ぐって

第5号(1991)

- 青地 伯水: ホーフマンスタールの『厄介な男』
における「なおざりにされた生」と「達成され
た社会性」
谷口 栄一: C. F. マイアーの『ユルク・イェナッ
チュ』について — その多義性に関する一
考察
津田 保夫: 後期シラーの悲劇論に関する一考
察 — 悲劇的恐怖の概念を中心に
斎藤 昌人: 閉ざされる世界

第6号(1993)

- 片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進
曲』 — 「比較」と「繰り返し」のモチーフを
めぐって
千田 春彦: デア・シュトリッカーの『閉じ込めら
れた女房』について — 物語の重層構造
の目指すもの
福田 覚: 自然模倣説における真理媒介の構
造(1) — レッシング〈詩学〉に潜在する模
倣説の輪郭
青地 伯水: W. ヒルデスハイマーの『リープ
ローゼ・レゲンデン』におけるグロテスクなも
のについての一考察

第7号(1994)

飛鳥井 雅友: 「しばしばそれは絶望的な対話
なのです」 — パウル・ツェラーンにおける
対話の概念をめぐって

吉田 孝夫: 時間の渦 — R・M・リルケ『新詩
集』の数篇から

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『右と左』 — 二
つの方向

第8号(1995)

濱中 春: シラーの『マリア・ストゥアルト』 — 二
人の女王のドラマ

中村 直子: 分離動詞の認定をめぐる諸問題

飛鳥井 雅友: 神学の拒否と詩学 — パウル・
ツェラーンにおける神義論の問題

第9号(1996)

中村 直子: 正書法と分離動詞

濱中 春: シラーの『ヴィルヘルム・テル』におけ
るスイスの風景

片桐 智明: ヨーゼフ・ロートの『百日天
下』 — ヨーゼフ・ロートのワーテルロー

飛鳥井 雅友: 「胸は張り裂け」 — ゴットフリー
ト・ベンの場合

第10号(1997)

濱中 春: シラーの『逍遙』における風景をめぐ
って — 風景の補償モデルとその矛盾

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(1) — 散文小品『通り(I)』について

片桐 智明: 物語の行方 — ヨーゼフ・ロートの
『果てしない逃走』と『カプツィン派教会納骨
堂』をめぐって

第11号(1998)

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける寓
話性(2) — 放蕩息子をめぐる二つの散文
小品について

片岡 直行: ドイツ語の与格の分類について

國重 裕: クリスタ・ヴォルフ『クリスタ・T への追
想』について — その語りの構造

飛鳥井 雅友: ゴットフリート・ベンにおける〈抒
情的自我〉概念の登場をめぐって

第12号(1999)

片岡 直行: ドイツ語の与格と空間補足語につ
いて

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーの絵画描写
について — エクブラシスの観点から

片桐 智明: ハイミート・フォン・ドーデラー四十
歳の小説 — 『最後の冒険』、騎士とドラゴ
ンの小説

KUNISHIGE Yutaka (國重 裕): Zwischen
Phantasiewelt und Wirklichkeit —
Essay über Ilse Aichingers „Die
größere Hoffnung“.

第13号(1999)

KUNIEDA Naotaka (國枝 尚隆): *Wilhelm
Tell als ästhetisches Projekt.*

吉田 孝夫: ローベルト・ヴァルザーにおける通
俗小説とメルヘンの再話について — 対
句法に関する試論

第14号(2000)

廣川 智貴: 文体論の理論と実践 — クライス
トの『ロカルノの女乞食』を例にして

佐々木 茂人: カフカの作品における歌のモ
ティーフ — 『歌姫ヨゼフィーネ、あるいは
ネズミ族』を中心に

國重 裕: オーストリア小説に見る《家族ドラマ》
の変遷 — M.シュトレールヴィッツ『誘惑。』
(1996)

第 15号(2001)

- 伊藤 白: 『ブデンブロック家の人々』試論 — 「市民と芸術家」の生み出す四つの類型から
- 池田 晋也: アルトゥール・シュニッツラーの『自由への道』 — 市民的なものと芸術的なものあいだを浮遊する生
- 川島 隆: カフカの息子たち — 短篇「十一人の息子」読解
- 中原 香織: ヘルマン・ヘッセの『シッダールタ』について — 葛藤の不在がもたらす問題をめぐって
- 羽坂 知恵: 日常の「ヒーロー」 — ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について

第 16号(2002)

- 佐々木 茂人: 東方ユダヤ人難民とブラハのユダヤ人 — カフカの伝記研究のために
- 川島 隆: 「こいつは途方もない偽善者だ」 — カフカの中国・中国人像
- 國重 裕: ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 — ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に

第 17号(2003)

- 池田 晋也: 描かれた劇場 — シュニッツラーの短篇『侯爵様御臨席』
- 伊藤 白: ゼゼミ・ヴァイヒプロート — 『ブデンブロック家の人々』における女性像とキリスト教
- 川島 隆: ユダヤ人と中国人 — カフカにおける人種と性愛をめぐって
- 武田 良材: クラウス・マンの『メフィスト』 — ドイツ反ファシズム運動の失敗の反映として

第 18号(2004)

- 廣川 智貴: 主語の文体論 — クライストの『決闘』を中心にして
- 熊谷 哲哉: 言葉をめぐるたたかい — シュレーバーと雑音の世界

ASAI Maho (浅井麻帆): Sehen im Wörterverbindungsraum bei Rainer Maria Rilke — Eine Wandlung vom Sehen hin zur Rose

川島 隆: 『万里の長城』における「男性」と「労働」の位置 — カフカのシオニズム理解を手がかりに

伊藤 白: 白いドレスのロッテ — トーマス・マン『ワイマールのロッテ』における女性像

武田 良材: 道徳的な女たらし — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像

國重 裕: 現代文学は「歴史」を語りうるか? — Katrin Askan (1966~)に見るDDR 文学の現在

書評・文献紹介

第 19号(2005)

青木 三陽: 手紙を書く騎士 — 『バルツィヴァール』における「学識」と「書物」の意味について

樋口 梨々子: 文学創作への萌芽としての音楽美学 — E.T.A.ホフマンの短編『ドン・ファン』試論

寺井 紘子: ホーフマンスタール文学における生と絵画

浅井 麻帆: ウィーン分離派館とヨーゼフ・マリア・オルブリヒ — 時代と分離派が求めた合目的性

熊谷 哲哉: 結び目としての神経 — シュレーバーにおける宇宙と身体

池田 あいの: 手紙論としての手紙 — カフカの恋文をめぐって

伊藤 白: ショーシャ夫人は美しいか — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「東」

池田 晋也: ジャズアレンジされるヨーロッパ — ハンス・ヤノヴィッツの小説『ジャズ』

武田 良材: モラリストへの成長 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その二

書評・文献紹介

第 20 号(2006)

- 青木 三陽： 歴史とフィクションの狭間で — ヴォルフラムの「原典言及」をめぐって
- 樋口 梨々子： E.T.A.ホフマンの『新旧の教会音楽』 — 「ロマン主義的なもの」との関連において
- 伊藤 白： フロイライン・エンゲルハルト — トーマス・マン『魔の山』における女性像と「同性愛」
- 廣川 香織： ハリー・ハラールの痛む足 — ヘルマン・ヘッセの『荒野のおおかみ』における身体について
- 池田 晋也： 文学的ジャズ表象の諸形態 — ブルーノ・フランクとフェーリクス・デールマン
- 武田 良材： モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三
- 書評・文献紹介

INHALT

TERAI Hiroko :

Kunst und Künstler

— Am Beispiel Hofmannsthals und Rilkes (1)

HIROKAWA Kaori :

Erfülltes Ideal und verlorener Körper

— Über das Gesicht-Motiv am Wendepunkt von Hermann Hesses Werk (23)

NAGAHATA Saori :

Dunkelheit und Licht bei Johannes Bobrowski

— Über die Erzählung „Mäusefest“ (45)

{Übersetzung}

RUTSCHMANN, Verena [KAWASHIMA Takashi] :

Energische Mädchen – sensible Buben

— Zu den Kindergeschichten von Johanna Spyri (65)

Rezensionen (81)

研究報告 第 21 号

非売品

2007 年 12 月発行

発行所 京都大学大学院独文研究室 研究報告 刊行会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

郵便振替 01060-2-38520

印刷所 北斗プリント社

〒606-0864 京都市左京区下鴨高木町 38-2